

## 「ハイエクの心理学と進化論——『感覚秩序』と『文化的進化』」

吉野裕介<sup>1</sup>

ハイエクの執筆活動のなかで「中期」にあたる1940年代から50年代は、認識論、心理学、進化論などの研究を進めた時期である。このセッションにおける本報告の目的は、あまり省みられることのないハイエクの心理学的考察が社会理論から独立しているのではなく、むしろ重要な基礎的考察を提供していると示すことにある。さらに、ハイエクの「人間」と「社会」の論理が、「進化」概念を軸に関連して把握できるという見方を提出する。以下では、第1節に心理学、第2節に進化論を吟味し、第3節に両者の関係性の意義を闡明しよう。

### 1 ハイエクの心理学的考察 - 『感覚秩序』

1) 背景 ハイエクの知的な関心は、経済学のみならず、学生時代から認識論や心理学へと向けられていた(Hayek 1994, p.62 邦訳十四頁)。特に、ハイエクが在籍したころの二〇世紀初頭、ウィーン大学の知的な風土は、エルンスト・マッハが大きな存在感を示していた<sup>2</sup>。その主張は、すべての知識は要素に還元できると考える「要素一元論」と呼ばれるものである。かれに影響を受けて、世界を統一的に把握する総合的な論理の構築を目指した者たちが多くいた。1920年代以降発展した論理実証主義はその代表的な存在である。ウィーンに生まれ育ったハイエクもまた、マッハの著作から影響を受けて心理学の勉強を始めた。ただし、かれの基本的な立場はマッハ流の一元論ではなく、二元論に基づいた心理学を追求した。

2) 動機 ハイエクが『感覚秩序』で展開した心理学は、現在で言うところの認知科学とか認知心理学に近い領域である。また、社会科学に人間行動の経験的な観察を取り入れたという意味で、行動経済学の先駆けとなる業績である。『感覚秩序』の原型となる論考は、かれが二十歳の時に書いた「意識の発生論によせて」(Hayek, 1920)である。結局経済学の道に進んだハイエクは、この草稿を公表せずにしまいこみ、アイデアの熟成を待ち、50年代に入りようやく完成させることができた。

---

<sup>1</sup> 京都大学研究員→中京大学経済学部専任講師(2014年4月より)。

<sup>2</sup> このことについては(吉野, 2014)の第二章を参照のこと。

同書が出版された少し前の時期のハイエクは、大衆向けの著作『隷属への道』(1944)の反響に戸惑いを感じていた時期であった<sup>3</sup>。意に反し売れ過ぎたこの本により、ハイエクは世界的に有名になったが、一方で専門家としてのかれの名前を高めることにはつながらなかった。このため、『隷属への道』(1944年)から『科学による反革命』(1952年)と『感覚秩序』(1952年)を上梓するまでの時期のハイエクのモチベーションは、ひとつには自由主義の基礎となる認識論や心理学、方法論の分野で研究を深化させることと、いまひとつは専門的な著作が書けることを証明することであった。

3) 内容 以下では『感覚秩序』と共に、論文「抽象的なものの先行性」を中心に、ハイエク心理学のエッセンスをみていこう。その中心的な概念は、「分類」と「配置」にあると端的に表現できる<sup>4</sup>。

外部の物理的な情報は、刺激（インパルス）として人間のなかに入ってくる。こうした刺激は、人間の心にある効果をもたらすが、すべてが異なる効果を持つとは限らず、共通の効果を引き起こして同じ階層（クラス）に分類されることもある。あるAという刺激が常にA”とは限らず、BやCにもなりうるのは、人間が持つ「抽象化」の能力による。言い換えるとそれは、人間が前もって備えている、外部からの刺激をどのように処理するかに関する一般的なルールである（Hayek 1968, p.36 邦訳一五七頁）。これは、ひとつの刺激から引き起こされる反応はつねにひとつ、という行動主義心理学の単純な刺激-反応モデルへの反論となっている。

同じ階層に分類された刺激は、元にあった刺激と結びついて配置され、そこで関係性を強める。異なる階層に分類された刺激の集まりは、ある場所に配置され、そこでまた異なる関係性を形成するようになる。こうした刺激の分類システムの繰り返しを通じて、徐々に心の認知のパターンが形成されて配置されていく。このようにして作られた精神的秩序の総体が「感覚秩序」である。このように、外的な世界である物理的秩序は「分類」と「配置」のプロセスを経ることで、個人の認知システムの漸次的な形成が可能となり、精神的な世界を形成する感覚秩序となる。

感覚は常に曖昧さを伴うものであり、ある刺激に敏感に反応する受容器官が違う刺激にはまったく反応しないこともある。刺激は現存の認知のシステムとの影響関係のなかで分類と配置を経て、新たな認知構造の部分的な形成に貢献する。こうして一人の人間に認知システム＝精神的秩序が徐々にできあが

---

<sup>3</sup>ここで同書がアメリカの一般の人びとに与えた思想的影響については(吉野,2013)を参照のこと。

<sup>4</sup>(松原,2011)でも、ハイエクの心理学の特徴は「分類」にあるとし、かれの資本理論にもこの概念を見出すことにより、ハイエク体系の一貫性を描き出そうとしている。本報告では、「分類」に加え「配置」も重要であるとする。

っていく。どんなに感覚秩序の形成が高度に進んでも、そこに物理的世界が完全に反映されることはない。なぜなら、ある刺激が引き起こす感覚は常に同じではないからである。なるほどわれわれが日常使う地図も、この世の中を正確に写しとったものではなく、デフォルメを伴ったある側面からの投影でしかない。物理的秩序を正確に心的秩序に反映させることは、本質的に不可能である。こうした感覚秩序は、前もって形成されたリンケージ（認知システムの集合）と新しい刺激とによって絶えず修正されていく「地図」と称されている。

こうして、外部からの情報を分類と配置し、人間内部に徐々に「地図」ができる過程が、感覚秩序の形成である。できあがった感覚秩序には、その人間固有の認知に関するパターンやルールが埋め込まれている。外的な刺激がこれまでの関係性をもとに分類され、それが心に適切に配置されていく過程は、ルールにもとづき情報を処理し、心的システム全体が発展していく過程でもある。それこそが、ひとりの人間の持つ認知システム、すなわち「心」である。「心と呼ぶものは本質的に、特定の行為を複合的に決定しているそのような多数のルールのシステム」（Hayek 1968, p.42 邦訳一六四頁）なのである。感覚秩序とは、ここで「人間の情報処理システムに関するルールの集まり」を指すと言えよう。

4) 意義 それでは、ハイエクが心／精神の問題を論じる際に、あえて感覚秩序という表現を用いる意味はどこにあるのか。それはハイエクが、人間の認知システムとは、人間に本来備わっていたものでも、自ら作り出したものでもなく、分類と配置の結果、意図せずしてできあがった「秩序」と考えているからだ。その知見には、社会理論における「自生的秩序」との相似的な関係が見られる。

意図せずして形成され、一般的に機能するルールが存在し、個別の行為の蓄積であるという意味で、心にある感覚秩序と社会にある自生的秩序とは、確かに関連した論理である。それはどちらも全体として設計されることなく、結果として徐々に形成されてきたものだ。それでは、この心と社会という二つの論理を貫く視点とは何か。本稿においてはそのひとつを、ハイエクの「進化」という概念に求めたい。

## 2 ハイエクの市場社会論 - 「文化的進化」

ハイエクは1967年の論文「行為ルールシステムの進化」以降、より明示的に進化的説明を取り入れている<sup>5</sup>。それはかれの思想体系において重要な位置を占める一方で、批判が向けられることも多い。ハイエクはなぜ進化論的説明を最後まで用いたのか。以下に、ハイエクの進化論的説明の背景や内容、そして特に先の心理学との関わりを論じる。さらにかれの進化論的主張をふまえ、ハイエク思想を再解釈してみたい。ハイエクの進化論の特徴である、1)反合理主義、2)ルールのセレクション、3)「文化的進化」の三点からみていこう。

1) 反合理主義 もしハイエクが自由な社会の優位性を理論的に擁護しようとするならば、現状の妥当性を獲得したものであることを主張せねばならない。しかしながら、ハイエクの反合理主義の前提から言えば、功利主義的説明は回避すべき論理である。なぜならハイエクにとって功利主義とは、引き出される帰結を正確に予想し、有効に機能することについて既知であることが仮定されている、合理主義の前提に立った思考法だからである。ハイエクの知識論においては、人間は本質的に無知であることが前提とされている。このため、経験的なテストによる生き残りを主張することで現状の市場システムを肯定するためには、進化論的説明が適しているとハイエクは考えた。

「自生的秩序」という用語を使うことからわかるように、ハイエクの説明では、市場社会とは自然に生まれたものでも、誰かに設計されたものでもない、歴史的な産物である。かくして、文明社会に機能する様々な制度は、セレクションを経て生き残った進化の結果であり、合理的な計画によるものではない。しばしばハイエクは、「自生的秩序」を「伝統」や「道徳」と言い換えているが、これらはセレクションの過程を経て生き残った社会制度という意味で共通した性質を備えている(Hayek 1976, p.21 邦訳三三頁)。ハイエクが論じたのは、人びとが知らずに従い、成功に寄与してきた「行動ルール」が進化していくプロセスである。こうした人びとの試行錯誤に基づいた行動ルールの蓄積が、市場社会の発展の基礎となってきた。それは、合理的な判断に基づいて社会全体を設計する思想への反論となっている。

2) ルールのセレクション ハイエクの進化論において選択の対象となるのは、具体的には「ルール」である。これは具体的には複数の人間で共有される「行動様式」を考えればよいだろう。ハイエクが考える市場で機能するルールとは、命令形(～をせよ)での指令ではなく、否定形(～すべからず)で行動の範囲を規定する。同じ行動様式を採る集団で共有されているものを指し、ひとりの人間の習慣のこ

---

<sup>5</sup> ハイエクは50年代滞在了シカゴ大学で、集団選択などの最新の進化理論に触れていた。このことについては(江頭, 2012)を参照のこと。

とではない。だから個別具体的ではなく抽象的である必要があるし、その集団の人々に同じ様に作用するという意味で一般性を持つ。ハイエクの言葉では「非人格的な抽象的ルール」(Hayek 1979p.159 邦訳二一八頁)とか「一般的ルール」とされている。

ルールは集団で共有されるものだが、こうした集団は、そのルールの内容や帰結を決して知ることなくルールを採用している。はじめから設計することはできないが、新しいルールを採用した集団が結果的に成功すれば、そのルールは残り、また有効なルールとして異なる集団に伝播していく。成功しなかった集団が採用したルールは残らない。市場秩序全体から見れば、集団間のルールの選別を通じて、うまくいくルールとそうでないルールとの選別が起きている。このような選択の過程を通じて、ルールに暗黙的に埋め込まれた知識の伝達や模倣が起きている。ハイエクの進化論において、淘汰されるのはルールであり、伝達されていくのは知識である。

3) 文化的進化 このようなルールのセレクションが起きている市場秩序とは、誰が設計したわけでもないのに発展してきた文明社会である。ハイエクがこうした社会全体の進化を、あえて「文化的進化」と呼んだのはなぜか。社会進化論や社会ダーウィニズムとの違いを比較して考えよう。

まず、ハイエクは社会の発展、市場秩序の進化には、予め定められた方向など無いと考えており、常により「よい」社会に向かっていると主張しない。進化は常に無目的なものであって一定の方向を持たないし、それゆえ全体的な成長の価値は単に経済成長とは限らない。それでは、成長の基準とは何にあるのか。『自由の条件』以来ハイエクが常に念頭に置いていたのは、社会全体での「知識の成長」である(Hayek 1960,p59 邦訳八八頁)。つまり、ハイエクにおいては文明の発展とは、諸個人の試行錯誤の蓄積として社会に散らばる知識(暗黙的なものも含む)であり、それを活用できるような秩序の成長であると言えるだろう。ルールのセレクションを通じて人びとの知識が伝播し淘汰されながら伝達されていくプロセスが、全体として見れば文明の成長なのである。

ハイエクが生きた20世紀のヨーロッパでは、進化論の社会理論への拙速な適用が、社会進化論や社会ダーウィニズムというかたちをとって、植民地主義や優生学など道徳的に問題のある学説が生まれた。かれが進化論を自分の社会哲学の枢要に据えようとする際には、そうした類の社会理論とは異なることを明確にする必要があったのだろう。それゆえ、「文化的進化」とは、進化の無目的性や知識の成長を主張し、優生学などの悪しき進化論や社会ダーウィニズムとは一線を画すために必要な用語であった。

### 3 ハイエク体系における心理学と進化論の関係とその意義付け

1) 認識論と心理学の相似性—自然科学と社会科学との橋渡し こうしてみると、ハイエクの心理学は、その社会理論とも十分に関連を見出すことができる。感覚秩序の意義は、次のように概括できる。各神経回路の反応は、刺激の取捨選択を経た分類と配置によって認知のパターンが形成され、人間の感覚に関するルールが形成される。こうしたルールの進化に基づいた個人の刺激に対する反応の蓄積から、人間の認知システムが徐々に形成されていく。それこそが、心つまり「感覚秩序」の論理である。

次に、社会の論理つまり「文化的進化」の意義は、次のようになる。人びとの行為の解釈と決定の繰り返しが知識の伝達と蓄積を促し、それが集団で共有されるルールを形成する。ルールに内在したかたちで知識は活用されるが、こうした行為の繰り返しと知識の伝達によって、結果として自生的秩序が形成される。そして、ルールの選択を通じて起こる、人間全体の知的営為としての知識の成長を通じた進化が、「文化的進化」である。

ハイエクが自由主義社会を思想的に擁護するために取った方策は、単に設計主義やその基礎となる合理主義といった思想を攻撃するだけではなかった。かれはより積極的に論理を展開するために、「自生的秩序」論を深化させ、人間と社会を統一的に理解すべく「心と社会の進化理論」も用意していた。そこで導入された進化理論は、自生的秩序と並んで同様の位置付けを持たせたほど重要であった。それゆえ、「進化」概念を媒介に、ハイエクの心理学と社会理論に連関を見出し、その思想体系を連続したものとして捉えることは、一定の意義を持つと思われる。

2) ハイエク思想の現代的意義—「自由擁護論」から「人と社会のグランドセオリー」へ<sup>6</sup> 進化論的説明の問題点は、現状の説明にはなりえても、自由（主義）の価値を規範的に擁護することは難しいという点である。このためハイエクは、自由主義の優位性を訴える価値的な考察に加え、自由な社会が具体的にどのように実現されるかという手段の問題に取り組まざるを得なくなった。晩年のハイエクは、文化的進化の議論とともに議会制民主主義の問題を扱い、市場においてルールを成立させるための社会的条件について論理を準備したのである。ただしこのことは、ハイエクはある程度の政府の役割を認めていたことを示しており、かれの思想が無政府主義や自由放任主義とは異なるという解釈を導くだろう。

(参考文献リストは当日配布いたします。)

---

<sup>6</sup>ハイエクの思想体系における自生的秩序論と文化的進化論の不可分な関係については、(吉野,2014)の第五章を参照のこと。ここでは、「状態」を表す「自生的秩序」に加えて、「プロセス」を表す「文化的進化」を取り入れるために、進化論的説明が導入されたと論じている。